

伝文

日本口承文芸学会会報
〈伝文〉 第10号 1992年2月

発行 日本口承文芸学会
〒112 東京都文京区白山5-28-20
東洋大学・東洋学研究所 気付
電話03-3945-7483

昔話の神話学的研究の勧め

吉田 敦彦

口承文芸の中でも特に重要なジャンルとして言うまでもなく、神話と伝説と昔話とがある。この中のまず神話と伝説とは、たとえばギリシアとかインドなどそれぞれの土地や民族の神話伝説として、一まとめにされて取り扱われることが多い。また伝説と昔話はそれ以上にしばしば、ある地方とか村の伝説と昔話として、一括されて紹介されたり研究されて来ている。

それに比べて神話と昔話とは、一般には一まとめにされることはほとんどなく、むしろはっきりと区別され、別個の方法による研究の対象だと見なされてきている。だが昔話の中には実は、昔話そのものとしての固有の意味や構造に加えて、古い神話に通じる隠れた意味と構造を持つものが、数多くあると思われるのだ。

たとえば現代におけるもっとも偉大な神話学者であった Georges Dumézil は、もっとも初期の著作の中ですでに、ヨーロッパの昔話を、神話学的研究の対象としてきわめて積極的に取り上げた。

そしてその中にインド・ヨーロッパ語族がまだ共通の言語を話していた、数千年も以前にまで遡る古い神話の遺構が、分析できることを明らかにしていた。またその例に倣ってたとえば彼の弟子であった Lucien Gerschel など、やはりスイスとドイツとオーストリアの昔話を取り上げて、同様なインド・ヨーロッパ比較神話学の立場からの、優れた分析をした。

このような神話学の立場と方法による分析は、日本の昔話についても可能であるに違いない。筆者は事実、わが国の昔話の中に、起源を数千年以前の縄文時代にまで遡る、きわめて古い神話の遺構が析出できると考え、いくつかの著書や論文によってそのことを主張してきた。口承文芸学の内部でもまた、それぞれの専門の枠を越えた学際的な研究から、実り多い成果が生まれるものと確信し、昔話を神話学的にも研究してみる必要を、ここであらためて強調しておきたい。

(東京都 武蔵野市)

1991年度 第1回研究例会

1991年度第1回(通算第21回)の研究例会は、91年10月19日午後、中央大学駿河台記念館で開催され、飯倉照平(東京都立大学)と鈴木道子(中京大学)の二氏による研究報告がおこなわれた。司会は野村純一氏が担当された。

飯倉照平氏の発表は、「逃走譚にみる中国と日本 — 「牛方山姥」や「天道さん金の鎖」をめぐる」と題するものであった。日本の昔話でも人気のあるキャラクターである山姥は、中国のよく知られた昔話「虎のおばあさん(老虎外婆=天道

さん金の鎖型に近い)」と「虎の妖怪(老虎精=猿蟹合戦型に近い)」に出てくる人を食う妖怪によく似た特長をもっている。残忍な行為をするわりには、その実体は明確ではなく、子どもをおどすさいの想像上の妖怪に近い。山姥は山の神に由来すると考えるよりも、昔話の主人公として渡来した可能性もありうるのではないかというのが、氏の仮定である。

日本の「牛方山姥」では、山姥は殺されるさいに釜の中や木の唐櫃(からと)に逃げこむ話が多いが、これは中国では南方地域に伝わる「虎のお

ばあさん」の変化型に見られる要素である。この話そのものが日本と関係が深いことからしても、これは偶然の一致とは思えない。もっとも中国の類話には、大根を食われる要素はあるが、魚を食われるくぐりはないなどの違いはあるという。

鈴木道子氏の発表は、「<琵琶と語り>の系譜」と題するものであった。正倉院に残る唯一の五絃琵琶に見られる胡人の図は、無帽で四絃の琵琶を弾くなど、なお解明できない謎をはらみながら、シルクロードにつながる<語り>の系譜を示している。氏の発表は、唐代の詩に見られる琵琶を弾く胡人の描写や正倉院の伎楽面から、その謎に迫ることに始まり、中央アジアからヨーロッパにつながるさまざまなリュート系楽器の名称・形状、

さらに、その伴奏によって語りだされる英雄叙事詩の内容や、語り手にまで及ぶ規模の大きなものであった。

語りものと語り手と楽器とのあいだには、切り離しがたい関係がある。楽器としては、とくに弦楽器が重要な役割をもっていた。日本のイタコが口寄せのさいに、オシラサマで棹弓の弦を打つのも、北方アジアのシャーマンの儀礼にもつながる意味をもつものであったという。

その楽器と語りの結びつきの様相を示すために、カザフ、トルクメンから、ユーゴスラビア、アルバニア、さらにモンゴル、イラン、中国などの弾き語り（あるいは歌い）を記録したテープが、会場で流された。聞きなれない耳には、いくらか戸惑いはあったが、貴重な一時であった。

□学会の英訳名について — 前号につづき、松村氏からの投稿と荒木氏のご意見を掲載します。

（本年6月の総会で結論をだしたいということです。）

新会員からひとこと

松村 賢一

口承文芸がいかなるものか、そのあつかう範疇もよく分っていない新会員ですが、学会の英訳名についてひとこと。

Folk-Narrative ということばが、「広く口伝えされた文芸全般を指すことば」という了解のもとなら、The Japan Society for Folk-Narrative Research でもよいと思います。

また、竹原氏のもの [The Japan Society for Oral Literature Studies — 編者注] もよいと思いますが、これを少し変えてThe Japan Society for the Study of Oral Literature とすると、音の流れが良いように思われますが（JSSOL）。あるいは Japan Oral Literature Society とするのもひとつの手です（この場合、Society 自体が学会の意）。

また、The Oral Literature Association of Japan や Japan Oral Literature Association (JOLA ジョラ?) も可能。（東京都三鷹市）

問題提起者として

荒木 博之

日本口承文芸学会の英訳について、いろいろな方の御意見が出た。その段階で、問題提起者である私の考えを再度聞かせて欲しいということであ

る。

何人かの方々の御意見を読みながら、やはり Society for Japanese Oral Literature が良いのではないかと考えた。literature はそれ自身「書かれたもの」という含意を持っているが、既にコスカンの *littérature orale*, ステイス・トンプソンの *oral literature* という用例もあるし、柳田国男の「口承文芸」もコスカンのそれによっているということもある。

さらに念の為に literature をウェブスター国際辞典・第3版によってみると、「散文あるいは韻文で書かれたもの、特に形式や表現にすぐれ、時代を超え、かつ普遍的な興味をもたせるような考えを表現したもの」とある。これであれば *oral literature* は、民謡や諺、唱え言などを含むもの、と考えても一向に差し支えない。

それでもネイティブ・スピーカーの意見を聞く必要はあるだろう。そこで、前インディアナ大学民俗学部助教授で日本民俗学を教えていたロバート・J・アダムス氏の考えをただした。アダムス氏は Society for Japanese Orale Tradion がベストであるという。

なるほどと思ったが、逆に *oral tradition* となると、日本語の適訳は「口頭伝承」ということになって、そこにやや問題が残ろう。いずれにする Society for Japanese Orale Literature か Society for Japanese Oral Tradion のどちらかということになろうか。（福岡県）

《仲間たち》

比較民俗学会

繁原 央

昭和46年、東京の原宿駅に近い千駄ヶ谷公民館の一室を借りて、月1回、土曜日、「比較民俗学研究会」という集まりを始めた。民俗学の研究を日本を中心に通文化的に試みようという仲間の会で、新しい口承文芸の研究を夢見て、季刊雑誌『口承文芸研究』を計画、小さな文芸雑誌に大きな広告を載せつけ、創刊の機を待ったこともある。その誌名は、この会に譲ったかたちになっている。

小島瓊禮・嵐義人・西脇隆夫・菅居正史・山田俊幸・佐藤健二・岩切信一郎・鎌田東二・茂木貞純・故木村龍生と、20名近い常連の多くは、大学院生であった。

その後、卒業・就職とちりちりになり、2年ほどの中断があったが、昭和54年秋、奈良に集まろうと、帝塚山学園の土岸喬慶が事務局になり、「比較民俗学会」として再出発した。

以降、昭和55年から毎年、奈良など近畿圏、ときには首都圏を会場に、年次総会と説話学の達成を旨とする説話学会議を開催し、公開講演・個別発表・共同討議・懇親会と、有意義な集会の方法を模索しながら、今年でちょうど一紀、12回になる。その願いは勉強しあうことにある。

共同課題は説話に限らず、媽祖信仰・十三塚・鯨絵・道祖神・麦の祭りなど、折々の話題を取り上げ、民俗学の方法の研鑽につとめている。

第1回以来の共同研究に『シッディキュル』研究がある。チベット版・モンゴル版の日本語訳と各説話の比較研究をしている。その中では斧原孝守のように新しい仲間も育てている。

われわれの会は、建物のない研究所を旨としており、一人で出来ないことを共同でしようとしている。そのためには会誌が充実しなければならない。よちよち歩きで『比較民俗学会報』（月刊）も73号まできた。第二紀は、この方面の努力が必要になろう。

民俗学は本来比較民俗学である。多くの方のご参加を期待している。

(連絡先。〒420 静岡市瀬名492-1 繁原央。年会費2000円。振替/大阪5-41316/比較民俗学会)

《外国通信》

ドイツのテュービンゲンから

間宮 史子

ドイツ南西部に位置する、古くからの大学都市テュービンゲン。ここには、ヘルマン・パウジンガー教授が率いる経験文化学研究所（正式名称はLudwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft）がある。テュービンゲン大学では20年前に、ドイツ民俗学の近代化の中で、従来の民俗学（Volkskunde）科という名称を廃して、経験文化学（empirische Kulturwissenschaft）科と、その名称を改めている。（このいきさつについては、坂井洲二著『ドイツ民俗紀行』法政大学出版局1982にくわしい。）

長年この研究所の所長を勤められたパウジンガー教授は、昨年秋に定年退官されたが、ゼミナールはまだ持たれている。今回は、教授のこの冬学期のゼミナール「はなし—日常語られる話の形式と機能（Geschichten-Formen und Funktionen der Alltagserzählung）」を紹介したい。

従来の口承文芸研究は、もっぱらメルヘンや伝説といった、伝承された半ば文学的な文芸形式を研究することに重点をおき、日常語られる話を顧みなかった。しかし実際には、さまざまな「はなし」が今日に至るまで話の大きな位置を占めている。そこで、このゼミナールでは、つぎのようなテーマを取り上げている。会話と話の違い、子どもの絵と話、子どもの話（大人の話し方との違い）、話すこと（話の機能/共通の話/世代間の話）、おしゃべり、うわさ話（特に戦争におけるその機能）、センセーショナルな話（いわゆる現代の伝説、パウジンガーは“Sensationsgeschichten”ということばを使っている）、ジョーク、前東西ドイツ国境地帯の話、戦争体験の話、女性の話—男性の話（その性による違い）、旅行の報告、ライフ・ヒストリー、語りのトレーニング及び人前で語られる話（おもに現代の語り手について）、病院における患者の話、裁判における話し方。

このようなさまざまなテーマを通して、まだあいまいな「日常のはなし」というジャンルを明らかにし、その主題、様式、構造、及び現代社会における機能を問うことが、このゼミナールの目的である。（テュービンゲン大学に留学中）

《こえ》 テレビと昔話

小池 淳一

青森県に8年ほど前から付き合っ話をして聞いて
いるおばあさんがいる。伝統的な意味において優
れた伝承者で、また人間としても実に多くのこと
を私は彼女から教わっている。昨年、彼女の語り
に魅せられた者たちが集まって昔話集を作る相談
を始めた。その際に彼女が備忘のために書き蓄め
ていた昔話の筆録を見せてもらうことができた。
広告紙の裏を利用して変体仮名混じりで丹念に記
されている文字の列に私たちは驚き、感動した。
この話の数々を何とか位置づけたいと考えた。

そして、詳しくその筆録を見せてもらいながら、
ある事実に私たちは気がついた。彼女は父祖から
受け継ぎ、「語れる」昔話とともに、はっきりと
それらとは区別しながら、テレビの「まんが日本
昔ばなし」をも一緒に筆録していたのである。そ
れも彼女は「忘れたくない」と思ったから文字に
残したのだ、という。

一次的な声の文化と二次的な声の文化とを峻別
する必要はいうまでもない。二次的な声の文化は
文字や印刷技術といったものを前提として成り立
っている(W・J・オング『声の文化と文字の文化』)。

—— 受贈書リスト ——

寺岡寿子「二つの灰かぶり — ハンガリーとグリ
ムと」(『広島ドイツ文学』6、紀要)
Clyde Davenport, Tatsuo Namba(南波辰郎)“Tales
of Olden Times in Shobala”(英文、庄原市の伝
承)(『広島県立大学紀要』2巻1号、90.12)
沖縄国際大学文学部紀要(国文学篇13号) 91.3
上代の文学(国文学研究資料館講演集12) 91.3
静内地方の伝承 I 織田ステノの口承文芸(1) 静
内町郷土史研究会 91.4
近松研究所紀要(2号) 園田学園女子大 91.6
日本民俗学(187号) 日本民俗学会 91.8
昔話の成立と展開(昔話論集 I 土曜会) 91.10

☆今号もワープロとコピーで作りました。次号は92年9月刊。 [編集担当: 飯倉・常光・徳田]

テレビの「昔ばなし」は多くの口承文芸研究者の
長年の努力の結果である資料集の蓄積に依拠して
放送されている人気番組である。しかし、それを
享受する伝承者は、研究者が追い求める伝承とそ
の成果である放送とを、文字にするというレベル
では等価値に受けとめていたのである。

かつて宮本常一はラジオやテレビの普及によっ
て自分の言おうとすることを心おきなく語り、心
がふれあうような細やかさが失われつつあること
を指摘した(『民衆の生活と放送』著作集2 所収)。
今では伝承者がテレビの「昔ばなし」を楽しむよ
うになった。すると、私たちに必要なのは単純に
こうした疑似的な民俗を対象にすえることではな
く、それを成り立たせている関係を意識化し、細
かく検討していくことではないだろうか。さらに
テレビの「昔ばなし」をさまざまな形で受けとめ
ていく人々のくらしを見失わないようにするこ
とが求められているのである。

まず、私はそれを気づかせてくれたおばあさん
との対話を繰り返すことから始めなければならな
いだろう。「忘れたくない」「語れる」ことは、
そのなかにゆっくりと姿をあらわすに違いない。
文字を操り、テレビを見ることは、彼女も私と同
じ時間を過ごしているという何よりの証なのであ
る。

(東京都調布市)

民具マンスリー(24巻1~9号) 神奈川大学日本常
民研究所 91.4~12 (同研究所要覧1991も)
歴史と民俗(7, 8号) 同上 91.7, 91.10
日本学術会議月報(32巻7~11号) 91.8~11
日本民話の会通信(96~98号)
民話の手帖(48, 49号) 91.8, 91.11
奄美博物館紀要(創刊号) 名瀬市立奄美博物館
91.3 (同館館報創刊号、展示目録も)
宇都国文研究(22号) 宇都短大国語国文学会 91.3
津軽の民話(会誌 7号) 津軽民話の会 91.10
奄美沖縄民間文芸研究(14号) 同研究会 91.7
国文学研究資料館報(37号) 91.9

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求ください。 入会金1,000円、年会費4,000円。
入会申込書請求・送金先: 〒112 東京都文京区白山 5-28-20 東洋大学・東洋学研究所 気付
日本口承文芸学会事務局 (TEL.03-3945-7483) 振替: 東京 8-44834
The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o The Institute for Asian Studies, Toyo
University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo, Tokyo, 〒112, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください